おれんじ通信 13

知って支える認知症

寄り添い、支える⑦
家族

ある80代男性は、実際には見えないものが見える幻視を主症状とするレビー小体型認知症と診断されています。妻と二人暮らしの男性の日課は朝食の支度。天気の良い日は妻と近所に買い物に出かけます。また、近くに住む娘が毎日電話をかけ、服薬の確認をしたり、足らない日用品を買い足したりしてくれます。「困っていること？無いよ。娘がいてくれるから」と話す男性。

娘さんは、「デイサービスを利用するようになり、父は感情的になることが少なくなった。母にとっても気分転換になっている。父の幻視に穏やかな対応を心がけ、いつも実家の事を考えている。認知症に対して偏見があるかもしれませんが、誰でもなり得ることで、『そういう人もいる』ということを知り、温かく見守ってほしい」と話します。

◇　　◇

次回は「寄り添い、支える⑧」です。なお、おれんじ通信への意見をお寄せください。

問地域包括ケア推進課　06(4309)3013、FAX06（4309）3848